

19世紀から20世紀始めにおける
文学と複製技術ーブルーストを中心に

Litterture of tochnologies de reproduction du 19emeau
debut du20 eme siecle – autour do Proust

根本 美作子

NEMOTO Msako

個人研究費を利用して今年は写真に関する数多くの文献に目を通すことができた。本研究の出発点には、ペンヤミンが『複製技術時代の芸術作品』で展開したテーゼがあった。その有名なテーゼによれば、写真と映画という複製技術の登場によって、芸術作品の性質が変わっただけではなく、そもそもわれわれの知覚そのものが変化を蒙ったはずであることになるが、知覚の変化を明確にすることはきわめて難しい。しかしその変化を今回私はブルーストの『失われた時を求めて』にはっきりと読み取ることが出来た。ブルーストが生まれたのは1872年。映画が誕生するのはその約四半世紀後である。写真のメカニズムが公開されたのは1839年であるから、ブルーストが生まれた頃にはもうかなり普及していた。勿論、写真機を持っている者はいまだ限られた人々であり、写真屋に家族写真を撮りに行くことがまだ一大イベントであった様子が、『失われた時を求めて』の中にも描かれている。しかしブルーストはこの写真というものにひどく拘り、作品の要所要所で写真を登場させているだけでは

なく、写真なしには考えられない感性を物語っていることが、今回明確になった。さまざまな描写が、事物を断片化し、それらをいくらかでも移動可能にする写真の視点で描かれていることもさることながら、今回もっとも興味深かったのは、無意志的記憶というブルーストの発見そのものが、写真の原理に非常に似通っている点である。無意志的記憶は、現在の中に突然、全く忘れられていた過去を出現させる。もはや存在していないと思われていた記憶が現在に甦るのだが、それは単なる記憶の蘇生ではない。甦った記憶は突如現在という時間の中に侵入し、そこにより生々しい現在として再度体験されるのだ。その生々しさは、写真というメディアの持つ独特のリアルさと奇妙に似通っている。遠くにあったもの、不在のものを、現在に存在させる心理的メカニズムである無意志的記憶は、写真のメカニズムを下敷きにしていると言えるだろう。二〇世紀という時代の到来を生きたブルーストによって、記憶は連続し、一貫性をもった人間の一つの機能という単純なメカニズムから、写真のアルバムのように断片的で、気紛れな何かと化したのだ。写真誕生当時に纏わる文献を繙いていくと、写真という発明が、来るべくして到来したにもかかわらず、一端発明されるや、その内容が人々の想像を遙かに凌駕したことがわかってくる。そもそも写真は「発明」されたのではない。写真を発明したとされるダゲールは特許を取らずに、その原理を1839年に公開し、彼にフランス政府が死ぬまで年金を支払うという決議が議会で可決されたのだ。現実をただそのまま撮るだけの写真は、まったく新しいものを作り出すという意味での「発明」ではなく、むしろもともとあった原理を「発見」したと見なされたのだ。そして写真が、人々と〈いま・ここ〉にある現実との関係を完全に刷新したことを、『失われた時を求めて』はいわば証言しているのである。